



「14歳の君へ」を読んで

上原中学校 二年三組 大谷 百合香

私はもうすぐ、十四歳になる。今まで生きてきた間に沢山のことを経験し、学んできた。だが、自分自身を見つめ返したことはあまりなかった。十四歳になる機会に、これからどのように生きていくのか、どのような考えを持っていくのかゆっくり考えてみたいと思った。そこで手に取ったのがこの本「14歳の君へ」であった。読めば読むほど、私はこの本の世界に吸い込まれていった。これから、心に残った部を多くの人に知ってもらいたいという思いを持って、私の思いや感想を書いていきたいと思う。

#### 「友愛」

私は中学生になって、沢山の友達ができる。だが全員が本当の友達かと言われたら、そうではないと答えてしまうだろう。人に好かれることが好きで嫌われることが嫌いだった。だが、人に嫌われるのがイヤ、怖いと思いつ過ぎてしまい、人に好かれようとあれこれ工夫してしまった。例えば、自分は反対していてもその人の意見に賛成したり、優しいフリをしたりなど。人に嫌われないように、逆に好かれるようにと思って行動していた。だから、本当の自分ではないから、本当の友達と言えない友達がいる。また、私たちはまだ中学生だから、心底困ることに出合うことは少ないそうだ。だから今の友達には、その場の楽しさや、淋しさの解消しか求めていないことに気が付いた。真の友情よりも、偽りの友情の方を多く作っていた自分を、空しく、情けなく感じた。だった

ら、どうすれば良いのか。筆者は、「人に好かれようとするよりも、人を好きになるようにしよう。」と助言してくれた。このように気持ちを切り替えれば自然と、人目を気にせずありのままの自分になれると思った。このテーマでは自分らしくなることが、人には一番魅力的に見えると教えてくれた。

### 「勉学」

私は学校や塾、家で勉強している時、何故こんなことを勉強しなければならぬのか、本当に必要なのかとよく思ってしまう。私がそう言うのと、周りの大人はこう言う。「良い成績をとって、良い学校に行つて、良い会社に入るため。将来、困らないようにするため。」と。でも何だか納得できなかった。そんな気持ちを筆者はよく分かってくれた。筆者は「勉強をするのは、賢い人間になつて、賢い人生を送るためだ。」と言う。では、賢い人間になるためにはどうしたら良いのか。やっぱり、ひたすら勉強するしかないのかと思った。でも違った。問いを持って、自分で考え、知ることができると良いと書いてあった。本当に「知る」ということは、例えばローマ帝国の崩壊の年号を知っているということではなく、何故滅んだのか、ローマの人々の気持ちはどんなだったろう、そういうことを自分のこととして想像して、そして納得できることを言うそうさ。なのでこれからは、勉強だけではなく、スポーツや芸術など全てのことに共通して自分の頭で考えて、新たに知ったことを自分のものにしていきたいと思った。

### 「言葉」

私は言葉について考えたこともなく、あまり大事なものではないと思

っていた。だから、きつと自分がこのテーマを読んでもしっくり来ないのではと思った。だが、ページが進めば進む程、言葉についてより深く考えたいことができた。

言葉は人を優しい気持ちにしたり、悲しい気持ちにもできる。つまり、扱い方次第で人を左右する力を持つ、素晴らしくもあり、恐ろしくもあるのではと筆者は言う。確かにそうだと思った。チャットなどで当たり前のように人を傷つける人がいる。これは言葉が及ぼす影響を知っているからである。使い方も間違っている上に、もっと言葉を大事にしなければならなかった。そのためには「人間が言葉を支配しているのではなく、言葉が人間を支配している。」ということに気付くべきだと言う。そうすれば言葉を節約して使い、適切な言葉、不適切な言葉を自分で判断し選択できるようになると思った。これからは、言葉の持つ力を理解した上で周りの人と関わっていききたいと思った。

今回書いたこと以外にもテーマは「宇宙」、「お金」、「戦争」など沢山あり、それぞれ学んだことは私の血となり肉となり、自分のものとなった。自分の生き方、考え方もしつかり持つことができた。また、得たものを自分のものにするのではなく、一人でも多くの人に知ってもらい、考えてもらい、理解してもらいたいと強く思った。そしてこの本を通して、私の人生はこれからがスタートだから、自分の未来に自信を持つていこうと思えた。十四歳になる節目に、素晴らしい本「14歳の君へ」と出会えて良かった。